

「夕日が落ちてひとときの平和」

戦況なんか一兵卒でも何となくわかるものだ。来る日も来る日も、前線からの負将兵の送られて来るのと退却ばかりが目につく。我々も後退ばかりで、その度に新しい陣地を作る毎日だった。だが師団のお偉方の話では、北支、中支、或は内地から増援部隊が近々中に前線に到着するとのうわさもあった。きつ

故郷の想

一 湯井 幸平

と冬を見越した大作戦が展開されるのかも知れぬ。いよいよ八月末になって、敵は制空権を奪い、戦車、野砲もますますその数が増加した。

外蒙古と内蒙古とのいざこざがこんな戦争になってしまえば、日本の軍部も考えていなかっただらいい。

ハルハ川だって、両方で仲良く使えばいいものを——。草原だって海原とはよくいったも

の、本当に広大なものだ。まるで小さな宇宙だ。外蒙・内蒙と違ったところで同じ民族、同じ文化をもっているのだから、共存共栄ができないはずはないと思うのだが、どうも後ろ盾になっっている大國のソ連と、満州の支配をもくろむ日本との問題だったようだ。

五十年以上も経ってもこうして書くことには思い浮かぶ。あの戦争のことはいくら書いても尽きない。今考えても、あの戦争は決して民族愛や人間愛によ

る戦争ではなかったと思う。前線では命令されるまま、動物的に闘わされた我々にも、「仕方がなかった」だけでは申し訳がたため。死ぬまでこの反省を背負わされてしまった。

何といおうと、戦争は絶対に悪である。若い人に残す遺言である。

荒野を血で染めた激闘も、九月十五日、兩國の停戦協定調印でようやく終わった。

古平町史（第三巻）の編さんも、約四分の一にあたる第一次原稿を終える段階に來ました。

その中から、鉦山のうち「稲倉石鉦山」について写真・図表を入れて組んでみました。内容その他について広くご意見などいただきたいと思います。お待ちしております。

ご希望の方には配布致しますので、町史編さん室の方へご連絡

古平町史

稲倉石鉦山

ください。なお、次のことについて知りたいと思っております。また資料などお持ちでしたらお貸し下さい。

- 鉦石を馬車で運搬していたころの様子
- 鉦山を売却した経緯
- 鉦石の沖積み荷役作業を請け負っていた業者
- 稲倉石鉦山に関する写真

（電話 4212590）

古平町史 第二巻

ご希望の方は、役場総務課に申し込んで下さい。

ノモンハン事件では、古平町出身者で亡くなられた方が六人おられ、琴平神社境内にある忠魂碑に英霊として合祀されている。

- 白岩 敏明・五十嵐 正一
諏訪 甚之助・藤木 信次
幾井 廣吉・齊藤 昌二

4月の日出と日没

月/日	日出	日没
4/1	05:20	18:01
10	05:04	18:12
20	04:47	18:23
30	04:32	18:35

北緯 43° 15' 45"
東経 140° 38' 35"

随筆

古平 — 九

密航者の運河

吉川 義雄

大人たちの話に出てくる「オタル」という所は、人は毎日お祭の時みに着飾っていて、古平のお祭りよりも賑やかで、大きな店には猿もいるし、ものをしゃべる鳥も居る。マチ中電気が明るくて、提灯（ちようちん）無しでも歩けるのだという私の小学校入学直前だから、大正が終わったばかりの昭和の始めの頃、カレイが大漁の時、ウチの船がその「オタル」まで獲物を売りに行くことを私は知った。見知らぬ龍宮城みたいな世界は、私を引きつけてやまなかった。幼い私は密航を決心した。記憶では四、五人の乗組員がいたから五段型だと思うが、私はスキを見て川崎船の帆布の底深く潜り込んだ。子供の知恵は知れたもので、出航間際にあっさり発見されてしまった。しかし今でも不思議に思うこ

とは、幼年期の私を水瓶にたたき込むほどの、鬼みたいに恐れていた親父が、叱るところか、むしろ歓迎するほどの態度で私を小樽に連れ行ったことだ。風が無くなれば帆を下ろし、乗組員が一齐にギコギコ船を漕ぎ出す。そんな繰り返しは何べんあったことやら。ユートピアは遥か苦しみの果てにあるらし

積丹半島へ鉄道敷設を

祝賀の花火ついに上がらず

三月十四日、期成同盟会総会が町役場で開かれた。陳情から帰った種田富太郎道議も出席して、上京中の運動や衆議院通過の経過について報告をした。たまたまこの日は、学校が臨休になるほどの猛吹雪であったが、夕方からは風雪もいくぶん

く、船酔いで食べたものはもちろんのこと胃液までゲーゲー海に流してしまふ。「ほらア赤岩まで来たぞオーも少しだア」という。顔も上げられない地獄の潮路がどこまでも続き、小樽は遠かった。魚とヘドロと油の臭いで、もう一度胃袋を逆立ちさせられた。小樽運河は、猛々しい活気と喧騒ばかりで私をガツカリさせたが、大冒険を耐え抜いた満足感だけは十分味わうことができようだ。

コリもせず、いくらも経たない時期に私はまたその大航海をやっているから、生まれて初めて食べたカレーライスと、電

気館通りのスズラン灯と、土産に買ってもらった月遅れの大量の雑誌がよほど魅力であったらしい。

札幌が生活の本拠になってしま、年に何回か、郷里古平への往復の道すがら、必ず小樽運河のそばを通るが、何のための運河やら、昔日の面影はもうない。

あそこは魚の臭いの似合う場所、ガス灯の下を恋人たちにそぞろ歩きされると、大事なものをこ馬鹿にされている思いがする。

の連絡があり次第、まず花火を打ち上げて町民に知らせ、その後旗行列やちようちん行列、祝賀会などの盛大な祝賀行事を行うことにし、七人の常任幹事を選んでその後の成り行きを見守ることにした。

おさまり、会場には七十人程が集まり、終始熱気につつまれた総会となった。そして三月十六日には幹事会を開き、やがて貴族院での法案の通過を予測して、そうなった場合の祝賀の計画についての協議をした。貴族院での法案通過

町民期待のうちに、法案は貴族院に回されたが、三月二十六日で貴族院が閉会となり、今一步のところでは法案は審議未了となってしまう。夢はまた遠のいたのだった。期待が大きかっただけにその落胆ぶりは想像にあまりあるものがあった。

歌で詠む

鯨場風景

池田テール

掛け声が浜にひびきました。待ちに待った鯨の群来でした。

風さむき 浜に鯨のあふれたれば お握り片手に作業 続けき

鯨運ぶ モッコを背負い続く列 暮るれば浜に母を待つ子ら

浜は人と鯨にあふれ、生気すさまじいものでした。学校は臨時休校となり、全町民挙げての出勤でした。古平の一年の計がこの鯨にあつたのです。

海の色は白く濁り、鯨の千石場所と言われたローソク岩付近

「今日はこんな日」

小学校は国民学校と改称 すべては戦争に勝つために

[昭和16年]

明治以来七十年にわたって親しまれてきた小学校が、この年四月一日から全国一斉に『国民学校』となった。

町内の、古平(新地分校)・沖・明和・稲倉石の、五校も小

名が書き替えられたが、明和小学校は、二月に鴨居木分教場か

ら独立した途端の再度の校名変更であった。

には、海猫が絶えず群れ、まるで広い敷物のようになって海に浮かんでいました。

大正八年の浜町の大火の跡には、間もなく家が立ち並び、薄暗いランプが電灯に代わって明るい町になりましたが、その頃から豊漁の年は少なくなり、明治からの鯨の全盛時代は、終末を告げたように思いました。

その後は、漁の皆無状態が続き、一獲千金の夢は消え、豪奢だった網元の暮らしも苦しいものになったと聞きました。

鯨が来なくなったこの町は、寂しいものになりました。昭和五年、私たちが高等科二年生の時の修学旅行も、町議会にかかって取り止めになってしまったほどでした。

あの広い前浜も、海水の侵食を受けてなくなってしまうしたが、浜いっぱい、誰もが生き生きと働いていた昔の鯨場風景は、私の脳裏から生涯離れることはないでしょう。

友の気持ちでお互いが良い友になりましょう」、また服装については「なるべく靴下をはかないこと」「長靴をはかないで下駄にする」「興亜奉公日には代用食の弁当を持ってくるようにしましょう」

体育は鍛錬科として武道(剣道・柔道など)取り入れられ、また音楽の時間は国民歌謡が歌われ、運動場で全校児童が練習をした。しかし一方では、教科書も工夫された美しいものになったが、物資の不足から次第に粗末なものに変わっていった。(学校日誌より)

鯨場近くなると、青森方面から集団で働きに来る人を「ヤン衆」と呼び、「神様」と言っていていました。鯨漁の準備に浜は活気づきます。昔の前浜は広くて、沖には鯨の群来を待つ建網の舟が並んだものです。 浜いちめん 提灯明かり増えゆきて せわしき人影鯨 来し夜 暗い浜で差網の舟が出漁の準備です。鯨がいよいよ近づいて来たのです。 網起こす 掛け声ひびくあ のときの 浜はたちまち人あふれたり 沖の舟から早朝、力いっぱい

国民学校は、皇国民(天皇の治める国の国民)の練磨育成をその目標としたが、戦時中であり校長先生の訓示にもこんな言葉があった。 「戦地のことを思っ

がまん強くやること、戦



明和国民学校校印

物資の不足から次第に粗末なものに変わっていった。(学校日誌より)